

オーストラリア便り

—真冬のパースより—

永井 康子

羊とコアラとカンガルーで有名なオーストラリアという国は、赤道をはきんで日本とはちょうど反対側の南半球にあります。日本の二十一倍もある大きな国なのに、全人口は東京のそれより少し多い程度しかありません。ところで隣の畑はよく見えるもので、日本から眺めていた時は何と広くて美しい国だろうと思っていました。過去二回の旅行からは、人々の親切に触れ、と

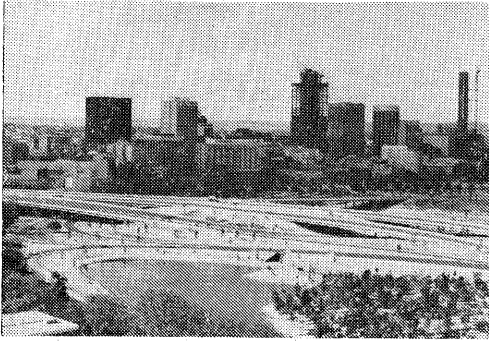
てもよい印象が残っていました。けれどもこうして一年間腰をすえて住んでみると、以前には見えなかったものが、また同じものでも違った角度から見えてきたような気がします。私とは逆に、日本へ何度か旅行したことのあるというこちらオーストラリアの方が、「日本は美しい、フジヤマ、超特急、日光、Oh beautiful」^①と一生懸命にほめてくれました。そして彼は、日本人

の親切にとっても感激しているようでした。私がオーストラリアを訪問した時、彼らはできるだけ親切にもてなし美しいものをたくさん見せてくれました。そして、私たち日本人もそうしてきたのではないかと思います。それがお客さまに対する礼儀なのでしょう。ところが、いざ移民となると話は違えます。私のように二年間の短期移住でも住む権利があります。旅行した時のように、「stay」ではなくて、「live」なのです。そうすると、外国人に対して見せかけばかり装うにはあまりにも期間が長すぎます。それでだんだんにボロが出てきてしまうのが常でしょう。また、私の方でも徐々に「見る目」ができてきます。がっかりしたり、改めて見直したり、これまで感じていたことを変えなければならないことがしば

しばありました。

パースというところ

昨年六月、日本をたつ前に「パースへ行く」と友だちに話したら、「パース!? 何でまたそんなところへ!?」といわれました。とにかく私の志すライフ・バイブル・カレッジがパー



鹿児島展

東京生まれ、東京育ちの私にとってシドニーは身近に感じます。それでいくと、メルボルンは大阪市に、パースは鹿児島くらいにあたるのでしょうか。そういえば先日、パース市と鹿児島市とは赤道をはさんで南北緯三十二度の姉妹都市になりました。

パースは、オーストラリアで一番美しいといわれている都市です。色あざやかな珍しいワイルド・フラワリーの大半は西オーストラリア州にあり、春（九月）の郊外は、目もさめるような美しさでおおわれます。そして、あの目まぐるしい東京に比べると段違いの静けさです。

スにあり、色の黒いオーストラリア人（アボリジニー）の居住保護区に近いので、私はパースに来ることになっていました。西オーストラリア州は、砂漠をはさんで東部オーストラリアとは、距離の上からもかなり遠くにあり、旅行ルートからは通常はずされていません。カンタス航空は、東京―シドニー間に直行便を飛ばせていますし、

今私が住んでいるライフ・バイブル・カレッジには、シドニーから来たフィリップという学生がいます。彼は、パースは静かすぎて気味が悪いといいません。お店は朝九時に開き、夕五時半に

はしまつてしまいます。土曜日は午前中だけ、日曜日はミルク・バーを除きどこも閉店です。アメリカから来たスティーブは、友だちの誕生パーティーのことを話してくれました。彼は土曜日の午後誘われたけれども、次の日(日曜日)のパーティーのためのプレゼントを買えなかったというのです。アメリカではいつも開いていたというのです。思い出すと、東京の日曜日のデパートの、あの人ごみのすごかったこと!! シドニーでさえ夕方遅くまでお店が開いているので、買い物ができたとフィリップはいいいます。彼がいうには、パースはシドニーやメルボルンのように発展しなかったのだそうです。

オーストラリアの教育

先日の新聞に、日本がいかに発展したかがのっていました。日本の発展ぶ

りは、オーストラリアとは比べものにならないというのです。その一つの理由に「教育」があげられていました。

日本には、年齢にかかわらず、小学校六年中学校三年はいやでも行かねばならない義務教育制度があります。ところがオーストラリアでは、小学校七年(五歳入学) 中学校五年間のうち、義務教育は十五歳までなので、十五歳になると共に、退学することができま

す。日本の幼稚園ではよく、「三月生れだから……云々」という言葉が使われていたように思います。けれどもオーストラリアでは、無理に入学させずに一年遅らせることが可能です。その結果、普通中学三年で十五歳になるはずなのに、中学二年で十五歳になってしまう例が少なくありません。四月生れの私は、一年損をしたといつてよくつぶやいたのですが、ここオースト

ラリアではそんな必要はありません。結局、中学二年の途中から中学三年の終りまでに、ほとんどの子どもは退学して就職してしまいます。中学を五年間終えるというのは、大学とか看護学校へ行く子どもだけなのです。日本のように学歴が要求されることはまずありません。就職口はしょっちゅう新聞に出ています。学歴に左右されることがないので、転職しても給料には変わりありません。勤務年限によらず、とにかく誕生日が来て年がふえれば、給料がふえるのです。

アメリカ人の宣教師のバーガー先生が、美容院から帰ってきて、そこでの話をしてくれました。特別に器用な若い美容師がいるので、その美容院はかなり有名です。ところがこの美容師にはこんな経験があるのです。例によって彼は中学二年で中途退学し、美容師

になり、若いのに腕が立つので、皆にすめられてアメリカに渡りました。ところがアメリカでは、中学三年までの義務教育制度があり、さらに美容学校を卒業して国家試験にパスしなければ、いくら腕がよくても一人前の美容師として雇ってもらえないので、やむなく彼はオーストラリアに帰ってきてしまいました。オーストラリアでなら学歴は問われません。ですから彼は、腕の立つ一人前の美容師として働くことができるのです。

アポリジニー

さて、オーストラリアは、もともと白人の国ではありませんでした。アポリジニーと呼ばれる皮膚の黒い人々の国でした。ところが、彼らは白人に押しつけられて、結果的にはオーストラリアは白人の支配する国となつてしま

いました。はだの色の違いによる差別がこの国にもあり、ある地域では彼らは職を得ることができません。私たちは、はだの色が違って同じ人間ではありませんか。アポリジニーたちは、私たちと同じ心をもっています。ただ文化的背景が違うのです。私たち日本人は西洋人と同じ服装をしています。しかし外見は同じでも、やはり日本人は今でもなお古くからの日本の文化的背景の中に生きていると思います。同じようにアポリジニーたちも、白人との混血等により外見は白人と同じ生活をして、でも、やはり彼らには彼らの背景があるのです。ですから、それを差別視するところに問題が起こり摩擦が生じるのではないのでしょうか。

「この国の教育は、子ども本意で甘やかしてばかりいるので、彼らはちっとも勉強しない」と、N・S・W州で日本語の先生をしている西田さんがいってました。宿題を出してもやってくる子はほとんどいないし、教えてもついてこない、本当にがっかりした」とぼやいていました。たしかに私たちはよく勉強しました。戦後のベビー・ブームに生れた私などは本当にガリ勉型で、必死になって勉強しました。ですから、同じ経験のある西田さんの気がぬけてしまうのも無理はありません。ところが反対に、こういう例があるのです。アポリジニー(混血)のキヤロルは、中学三年を卒業したのに全く字が読めませんでした。かなり頭の良い子なので、パース郊外の教会の牧師さんがひきとって教えたところ、半年後の今では、ほとんど不自由なく読めるようになりました。というのは、こちらの学校の先生たちは、生徒の成果をあまり気にかけないからだと聞き

ました。

いったいどうなっているのでしょうか。日本では、お母さま方は幼稚園の時から、一生懸命になって読み方書き方を教えます。ところがここではそんな必要はないのです。この西オーストラリア州では、普通五歳で小学校に入学するので、日本の幼稚園年長組の年齢がちょうど一年生にあたり、読み方を習います。そして二年生で書き方と進むのです。日本では、この年齢で大抵の子がすでに読み書きができると話しましたら、何でそんな必要があるのかときかれてしまいました。

オーストラリアの幼稚園

一昨年、オーストラリア東部を旅行した時、私はいろいろな幼稚園を見せてもらいました。朝から始まって給食、昼寝と続く園もあれば、午前午後

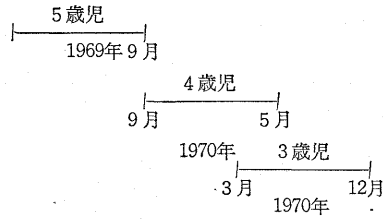
の二部制をとっている園もありました。私が訪問した園はすべて、共通して自由保育、同じ年齢のクラスが二つ以上ある園は一つもありませんでした。遊具は一応のものが揃っていましたが、今思い返してみると、組み合わせパズルなどを、子どもと一緒にすわって指導している先生の姿は見られましたが、子どもと一緒に遊びに加わっている先生の姿は一度も見なかったように思います。私の方が時間的に限られていたせいか、子どもたちがそれぞれよく遊んでいるように見えたせいか、あまり気にかけませんでした。けれども、先日パース郊外にあるレディ・ゴードヴィ幼稚園の一日を見て、何かそれとうなずけるものがありました。

この園には、三つの保育室のそれぞれにマジック・ガラスの観察室があり、幼稚園教員大学の学生のほか、か

なり多くの訪問客を迎えています。この園の保育時間は九時から十二時まで（昼寝なし）で、私は九時十五分前に園に着きました。パースの冬、特に七月は雨期で、この日も雨が降ったりやんだりの日でした。静かな住宅街にある園の門には、お母さんと一緒に歩いて登園してくる子どもたちの姿が、ちらほら見えました。そして玄関のホールには、十人ほどの親子が床にじっとすわっていました。一歩ふみ入れた私は、病院の小児科待合室のような感じがして、一瞬ドキッとしました。園長先生の説明だと保育開始の九時まで待っているのだそうで、各保育室では、それぞれ二人ずつ先生方が遊具を整えていました。

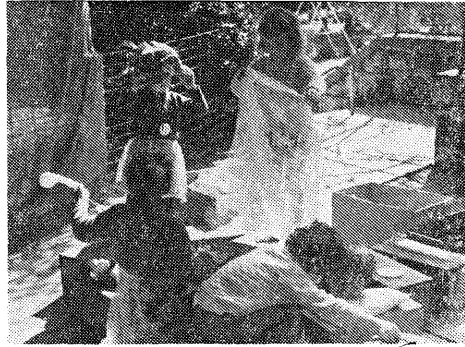
この園では、就学前の二年間を三つのクラスに分けて、それぞれの年齢に応じた適切な指導方法をとっていると

クラスの編成



新学期開始……2月
1月から12月生まれが同学年になる

のことでした。通常他園では、一年(十二ヵ月ごと)の区分けにしているのですが、この園ではユニークな方法をとっています。その区分は図に示してありますが、生れ月の重なり合っているところは、その子どもの発達程度によってどちらのクラスにでも属することができるよう配慮されています。(一九六九年九月生れの子ども、および一九七〇年三月～五月に生まれた



ままごと遊び
金あみのさく

子ども)これら三つの保育室は、年齢とその人数に応じて少しずつ広がっています。保育室ごとにお手洗いもついており、隣のクラスとははっきり区別されています。さらには、園庭も金あみのさくで仕切られています。

この“peer group”のよしあしについて園長先生のお話をうかがいましたが、根本目的は、年齢に応じて自由のびのびと行動できるよう指導することにあるようです。たしかに年齢が小さいほど、遅生れの子どもと早生れの子どもとの間には、多くの点でかなりの差があります。このクラス内での差を少なくするために、二年間を三クラスに、また園庭では年長組の年少組に対する圧迫をなくするために、ここで仕切つてあるのです。つまりたでの関係よりも横の関係を重んじていることになります。ですから、進級しても“小さい組のお友だちにやさしくしてあげましょう”などということはないのです。

おわりに

さて、これらのクラスを観察室から

見せてもらいましたが、どのクラスもあまり活気がなく、遊びの中に発展性が見うけられませんでした。私がお茶の水幼稚園で実習をした時、村田先生の林の組に、造形面でもとても創造的なお子さんがあり、クラス全体にとてもよい影響を与えていたという記憶があります。また双葉幼稚園で三歳児を受けもった時にも、やはり同じようなお子さんがいました。けれどもこの国では、どのクラスも皆、どんぐりの背比べです。子どもたち同士が影響しあいクラス全体が成長していくというよりも、年齢別のクラスに分けてあっても、あくまで個人が対象です。先生は各クラスに二人ずつ、メモ帳と鉛筆を持っていすに腰かけ、子どもたちのようす（特に成長の程度）を細かく観察していました。先生と子どもの暖かい

人間関係は、いったいあるのだろうかと思いました。先生方は、必要とあれば立って行ってたしかに指導しておられました。けれども、子どもと同じ立場に立って一緒に考え、子どもの中にあるものを引き出していくというより、何か上から見おろして、先生がもっているものを少しずつ子どもに与えていくという感じがしました。母親の子どもに対する内面的影響が大きいように、幼稚園の先生の与える影響力もかなりあると思います。幼児期におとなから与える影響は、将来どんな結果をもたらすことになるのでしょうか。こうしていくつかの園を訪問してみました。オーストラリアの幼稚園はどこでも自由保育を採用しているようでした。

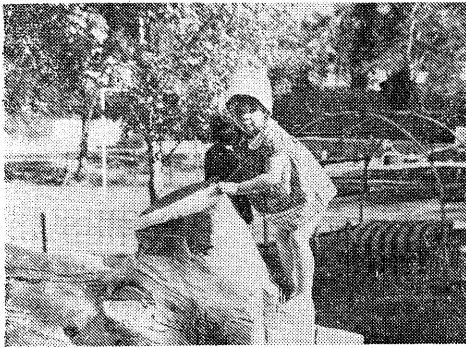
そして東部の諸州でも西オーストラ

リア州でも、幼稚園教員養成課程の内容は、同じ統一された考え方に基いているようです。教育の個人に対する役割、そして社会に対する役割は大変なものだと、改めて感じさせられます。日本の教育は、日本の社会に応じたように行われているのでしょうか。そしてオーストラリアの教育は、オーストラリアの社会に応じているのでしょうか。どちらの国でも、幼児教育の重要性が主張されています。ところが、幼児教育の何が重要なのか、オーストラリアと日本では違うように思います。いかに幼児教育が社会に影響を与えるのか、また実際的には、社会が幼児教育に影響を与えているのか、幼児教育に携わる私たちはさらに考えてみる必要があるように思います。

でした。赤い、小さな手でページをめくる子どもたちの姿が今も目に浮かびます。なかなか絵本にのってくれず、アノネー、アノネー、ワカラヘンとくり返す幼稚園児、絵におかまいなしにしゃべりまくるかと思うと、すくあきてシンドイカライヤーといい出す四歳児、一ページごとに話を完結させてしまう子、奇想天外な話をでっちあげの子、整然と過不足なく話を進めていく子、八十人がそれぞれ自分なりのやり方で自分自身の投影を、文のない絵本に行なっているのだなあという思いにかられたことでした。

録音テープの文章化も一仕事でした。一言一句聞き逃すまい、聞き違うまいとすればこれはこれで大変な難作業でした。巻き戻し、巻き戻して、同じ所を何度聞きなおしたことでしよう。しかしテープを聞きながら思わず吹き出したこともありましたし、一人ひとりの子どもの顔やようすがありありと思いつき出され、緊張の中に、表情のやわらぐこともたびたびでした。今、ここに並んでいるこのテープ、それは何にも代え難い私の宝です。

このたびの発表は、資料不足、統計処理の不備、大人との比較、など方法上の不満足な点が多いことは私自身よく心得ております。数多くの研究発表から選ばれて賞をいただいたことは、今後の研究をしつかりやりなさいというおぼし召しと解し、ありがたく頂戴いたします。皆様どうもありがとうございました。



自然木を使った遊具

オーストラリア便りより

50ページ参照